

# Alternative Systems Study Bulletin

メール版 第26巻第4号 (2018年10月28日)

21回目のメール版を送ります。

ルネサンス研究所などの複数のメーリングリストに投稿しますので、これまで手に取っておられなかった方々にも届くことになります。配信停止の手続きは、メールで連絡して下さい。メールで連絡して下さればいいのですが、メーリングリストのばあいは配信停止ができません。お手数ですが届いたら削除して下さい。

この小冊子は、1993年から発行しています。最初は知的創造集団のネットワーク形成をめざし、数人の同人で始めました。しかし、私が阪神大震災以降多忙になったこともあり、第4巻(1996年)からは私の個人誌として再出発しています。そのころは協同組合のシンクタンクづくりをめざしていました。シンクタンクづくりは実現していませんが、以降隔月刊で発行し、主要な論文はHPに掲載しています。

メール版で発行したバックナンバーは、PDFファイルにしてHPの「バラキン雑記」のところに掲載しています。ぜひご覧ください。

2015年度の『ASSB』のPDFファイル。

[http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog\\_id=239](http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog_id=239)

2016年度の方は次です。

[http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog\\_id=240](http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog_id=240)

2017~8年度の方は次です。

[http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog\\_id=244](http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog_id=244)

メール版は拡散自由です。またいろいろな意見や異論があれば、メールでお知らせください

編集 境 毅(筆名:榎原 均)

連絡先 〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169号 貿易研究会

ホームページ <http://www.office-ebara.org/>

メール [sakatake2000@yahoo.co.jp](mailto:sakatake2000@yahoo.co.jp)

購読料 無料 (カンパ歓迎)

カンパ振込先(郵便振替) 口座番号:01090-5-67283 口座名:資本論研究会

他金融機関からの振り込み 店名:109 当座 0067283

## 26巻第4号 目次

はじめに

お金の絵本プロジェクト第一回 2018年9月20日のもよう

第一章 お金(貨幣)誕生の秘密と謎(概要)

第二章 社会的象形文字としての商品

第三章 劇第一幕 社会的象形文字の第I形態

第四章 劇第二幕 第II形態から交換過程

第五章 思考による分析的抽象と価値形態の関係による抽象という方法の違い

## はじめに

今回は9月20日に行われたお金の絵本プロジェクト第一回目の記録です。恐らくこのような形で面白かつきちんと議論できたのは非常にまれだと考え、単独で編集しました。

このプロジェクトは、8月の三回のお話会の続きで、それを踏まえた議論になっています。お話会で一番焦点になったことは、生産者や商店主が物を商品として売り出す際に、その裏に無意識のうちに金を貨幣とする共同行為に参加している、という、お金生成についての私の解説でした。

普通、お金はどこかにずっとあって、それを中央銀行がいろいろな形で発行し、それをそれぞれが使っている、というイメージでしょう。しかし、この解説は、お金の生成が、値付けする人の主体的な行動に含まれる無意識の行為の結果である、ということですから、お金を自分自身の問題として捉える糸口を提供したので、議論が進展したのです。

そのような経過があったので、まずは意志支配ということの確認から議論が始まります。そのときにディング (Ding) とザヘ (Sache) の訳しわけが必要なのですが、これまで私は、ザヘの訳語を長谷部文雄にしたがって「物象」としてきましたが、やはりこれでは何のことかわからないという意見が出て、今回から「事物」という訳語に代えました。このようにすると、日本ではルカーチの物化論が物象化論とみなされているので、もう、物化＝物象化という学会の見解に対抗するには「事物化」という新たな訳語の方がかえって都合がいいかもしれないと思っています。なお、事物化の方がいいといったのは南京大学の張一兵『マルクスに帰れ』(世界書院)で、その主張に従うことになります。

第一章での導入の後、いよいよ第二章で社会的象形文字としての商品の解説に入りますが、やはりここでも初版本価値形態論の第IV形態と交換過程論との関係の解説から始まります。第三章からは劇をしました。参加者たちが第I形態から第IV形態までの商品の役割を演じてみたのです。その際ある人たちは、布とシャツといった、使用価値の表示を単なる記号と考えてしまう一般的な思考方法ではなくて、使用価値そのものを具体像として表象していることがわかりました。そういうこともあり、結構面白い議論となっています。なお、挿入している図は、1993年5月に発行した『ASSB』第4号「図解価値形態論」の付録としてつけたもので、これが今になって役立つとは感慨深いです。第四章の劇は、金を貨幣にする本能的共同行為です。

最後の第五章では、図解価値形態論につけた図にもとづいて、『資本論』冒頭の、価値形態論に入る以前の、商品の二重性や労働の二重性のところで使われている思考の方法としての分析的抽象と、価値形態論での総合による抽象、あるいは関係による事態抽象との違いについて議論しています。

このような議論をふりかえって、私としては、この活動を、デリダの言う散種、種まきだと自覚するようになりました。お金生成についてのこのような説もあるのだよ、ということを理解してもらって、この種がいつか育つことを期待するのです。その意味で、このプロジェクトは続けていきますが、他のところでもお金についての議論ができるような場を作っていきたいと考えています。

最後に、最近出た見田宗介の著書の補章「世界を変える二つの方法」から引用しておきます。

「新しい世界の胚芽となるすてきな集団、すてきな関係のネットワークを、さまざまな場所で、さまざまな仕方で、いたるところで発芽させ、増殖し、ゆるやかに連合する、ということである。」(『現代社会はどこに向かうか』、岩波新書、155頁)

お金の絵本プロジェクトは、まさに世界の萌芽となるすてきな集団として生まれたようです。この集団がそのように育っていくのか、また外部に感染した集団が生まれるのか、現代のサークル運動の一つの課題でしょう。

お金の絵本プロジェクト第一回 2018年9月20日のもよう

## 第一章 お金（貨幣）誕生の秘密と謎（概要）

最初から一緒に読みましょう。

①「秘密の謎を区別しよう。秘密とはその存在の理由、謎とはそれが目くらしすること。」

○／この一文の意味、わかりますか？

境／なぜこれを書いたかという、宇野学派の著名な経済学者が「秘密と謎は一緒だろう」と言ったので、引っかけられました。研究者ってそんなレベルです。

○／秘密になっているのは、その存在の理由が秘密になっているという意味だよね？

境／商品という存在の秘密というのは、それがなぜ存在しているかという理由でしょう。

○／そして、謎というのは、それが目くらしになっているという。お金というのがそういう存在なんだということなんだよね、きっと。

②「人が労働して物をつくり、それを商品にすることは、物に人が憑りつきモノ（事物）となり、そのモノ（事物）が人を支配する。これがお金誕生の秘密。」

境／物に取り憑くというのは、普通は労働を対象化するというふうに言いますね。ですから、商品というのは人間が生産するモノだと考えたとき、その生産物に人間の労働が対象化するとマルクスは言っていますが、それをここでは「取り憑く」という言葉をわざと使いました。事物というのは、僕は今まで「物象」という言葉を使って「物象化」と言っていたんだけど、この前、「物象」ではよく分からない、むしろ「事物」でいいんじゃないかということで、これからは「事物」でいくことにしました。それは、普通の物なんだけど、それが人を支配するような、ちょっと変わった物をカタカナで表現したり、「事物」という言葉で表そうと。ドイツ語で物は Ding（ディング）、事物は Sache（ザヘ）、マルクスはこの2つを使い分けている。ほとんどの『資本論』の翻訳書は同じ、全部「物」になっている。長谷部さんだけが区別して、「物」と「物象」と訳している。「物象」という言葉は長谷部訳から取っているんだけど、よく分からないから「事物」でいいんじゃないかと中国の研究者（張一兵）がそういうことを言い出して、僕もじゃあそうしようかなと。もちろん「事物」と訳している人も日本にいないことはないですが。

○／質問していいですか？ すごく分かるようで分からないところはここなんです。労働して生み出した商品がありますよね。

境／お百姓が大豆を育てて、とれました。これには、お百姓の労働が対象化されています、というふうに見ようと。単なる自然物ではなくて。もちろん、放っという、ただ自生的に育っている大豆をとってきた場合でも、「とってくる」という労働がある。とにかく人が作った物には、人の労働がそこに入っている。それを今は人が物に憑りついているというふうに見ようと。

○／人が労働したことがその物に入っているということですね。事物というのは、物は見える物としてですが・・・

境／それが商店にあって、「500 円」って書いてある。それが事物。

○／それが人を支配する？

境／だって、500 円払うわけだから。

○／ああ、わかりました。

境／結局、「500 円払え、払え」って商品に命令されているわけ。「取っていったら窃盗ですよ」って。

○／レジの人にお金払いましょうね、ということですね。

境／だから、我々は商品に命令されて生きているわけです。

○／わかりました。すごく混同していました。

境／何を混同していたの？

○／私たちの領域ではよく言っていたんですが、「人がモノ化する」という表現で、人間がモノ化していくような意味合いが浮かんでいた。

境／それは、そもそもルカーチという人が言っている。それはディングなんです。ドイツ語のディング。ザヘというのが事物。ルカーチが「モノ化」と言っているのを、日本語訳で「物象化」と訳してしまっている。ディングなのにザヘの意味にとって「物象化」と訳している。だから、日本の研究者の言っている「物象化論」というのは、どこかおかしい。モノ化というのは、本当に人間が物になっちゃうこと。ルカーチは、人間が物になっていて、物は法則に支配されるから、それを人間は理解できる、という組み立てになっている。そして支配側はそれに疑問を感じないが被支配側のプロレタリアはそれを理解して支配を打破しようという階級意識を持つという物語を紡ぎました。この物語は疎外論の一種で日本でも新左翼に影響を与えました。ヨーロッパでは結構、精神科医とかは、ルカーチの『歴史と階級意識』という本ですが、影響が強いですよ。平井俊彦訳で未来社から今でも出ています。

○／これは、人が物になっちゃうと言った人？

境／そう。日本では黒田寛一がそういう理論を継承しています。

○／物が人を支配する、物に対して 500 円払わなきゃいけないということは、ルールみたいなことですか？ 泥棒することもできるじゃないですか。それなら、支配されてないということになりませんか？

境／支配というのは、もちろん違う行動をすることは当然できる。奴隷が逃げるのと同じこと。

○／「ルールがあるよ」って自覚するってということですか？

境／そうそう。「500 円払わなくっちゃ」と自分から思っちゃう。それが支配。遺志支配ですね。

○／それをそういうふうに認知してしまった瞬間に、もう支配されているわけですね。

境／そうそう。そこが難しいところなんです。一方で自然物だから、これが500円で、500円払わなきゃいかんと思うんだけど、物だからね。人間だったら、俺に500円払えって言われたら、仕事してもらって払わなきゃいかんという場合もあるかもしれないが、人に言われたら支配されてるって分かるけど、物だったらそうは思わないよね。

## 第二章 社会的象形文字としての商品

### ①お金が生まれる前の商品世界

テキスト（改訂版）

#### A) 第Ⅰ形態（簡単な価値形態）

5メートルの布＝一枚のシャツ

布がシャツと等置されている。それぞれの価値が等しい。布は相対的価値形態にあり、シャツは等価形態にある。

すべての価値形態の秘密は、この簡単な価値形態のうちにひそんでいるにちがいない。同時にこの形態は謎かけをしている。（秘密と謎）

#### B) 第Ⅱ形態（全体的な価値形態）

5メートルの布 = 一枚のシャツ  
= 10ポンドの茶  
= 4ポンドのコーヒー  
= . . . . .

ここでは布の価値がはじめて真に価値として、すなわち人間的労働一般の結晶として示されている。

#### C) 第Ⅲ形態（一般的な価値形態）

1枚のシャツ =  
10ポンドの茶 =  
4ポンドのコーヒー =  
. . . . . =

} 5メートルの布

シャツだけでなく、コーヒー、茶、等々、要するにすべての他の商品が、それらの価値をいまでは布という材料で表現している。布は一般的等価物となり、すべての商品がリンネルを媒介にして互いに自分を人間的労働の同じ物質化として示している。

この形態は実質的には貨幣形態だが、貨幣は生成されてはいない。

現行版第Ⅳ形態は等価物の位置に「2オンスの金」をおいて、貨幣形態としている。だが、初版本文は貨幣形態とは異なる次の形態。

#### D) 第Ⅳ形態（初版本文第Ⅳ形態）

5メートルの布 = 1枚のシャツ  
= 10ポンドの茶

	=4 ポンドのコーヒー
	= . . . . .
1 枚のシャツ	=5 メートルの布
	=10 ポンドの茶
	=4 ポンドのコーヒー
	= . . . . .
10 ポンドの茶	=5 メートルの布
	=1 枚のシャツ
	=4 ポンドのコーヒー
	= . . . . .

境／これは、このテキストの第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅲ、第Ⅳ、というように表示しているがその形です。

○／第Ⅳになったら、もうお金は生まれているの？

境／今の資本論は、第Ⅳが貨幣形態で、お金が生まれているんだけど、初版でいくと、第Ⅳはここに書いたようにこんな形だから、これはお金じゃないんだな。第Ⅲのここはお金のポジションにあるんだけど、まだお金ではない。今の資本論は、これが金になったのが第Ⅳ形態になっているんだけど、初版は違ってこうなっているわけ。自分が作った物で他の物を買えたらいいなという、そういう形。布を作った人はこれで換えたい。シャツを縫った人はこれで換えたい。お茶を作った人はこれで換えたいと思うでしょう。その形が来ている。それで結局、この形になったら、どれも貨幣になりません。商品から貨幣になる形を追求しているんだけど、第Ⅳ形態は、どの商品も貨幣にならないという形なの。

○／貨幣を経由しなくてよくなるということ？

境／違う、違う。そうじゃなくて、何も買えない。そういう形で価値形態が終わっている。だから価値形態論の中では貨幣は生まれませんよというのが、マルクスの初版の主張なわけです。その次に、じゃあどこから貨幣が生まれるかということ、交換過程を経て生まれますと。交換過程には人間が登場します。人間が登場して貨幣を作るんだけど、それは商品に支配されて、無意識のうちに共同行為をやって、作るんですと。こうなってくるわけ。それはすごく首尾一貫しているんですね。

テキスト

#### 初版本文第Ⅳ形態の重要性

初版本文価値形態論では、現行版と違って貨幣形態は登場せず、この第Ⅳ形態で閉じられている。

貨幣が生み出されるのは次章の交換過程論でのことであり、そこではそれまでは背景にいた人格が「主体」として登場してくる。

この「主体」が商品に意志を宿すことで無意識のうちでの本能的共同行為を成し遂げ、その行為の結果として貨幣が生み出される。

価値形態論は商品を主体と見立て、商品自身の社会的関係を社会的象形文字として分析した。その場には人格は登場していない。貨幣は商品が描く社会的象形文字のサインを受けとった人格が行動することなしには生まれません。

E) 交換過程における貨幣の生成

1 枚のシャツ	=	} 2 オンスの金
10 ポンドの茶	=	
4 ポンドコーヒー	=	
.....	=	
.....	=	

第二章 交換過程、でマルクスは商品所有者を登場させる。この人格は「自分の意志がそれらの物においてある定在をもつところの諸人格」（初版交換過程）である。ところで現行版『資本論』とは違って初版本価値形態論では、最後の第IV形態が貨幣形態ではなく、逆に貨幣生成が不可能な形態だった。だから交換過程に登場する商品所有者は、考える前に行動して、無意識のうちでの本能的共同行為に参加し、そのことで貨幣を生成するのである。

(参考資料) 資本論現行版の場合  
F) 第IV形態 (一般的な価値形態)

1 枚のシャツ	=	} 2 オンスの金
10 ポンドの茶	=	
4 ポンドコーヒー	=	
.....	=	
.....	=	

現行版資本論の価値形態論では、第IV形態はこのように貨幣形態とされていて、初版本価値形態論の第IV形態とは異なる。

しかし、価値形態論で貨幣生成を説明してしまうと、どのようにして商品から貨幣が生まれてくるかという問題が隠されてしまう。

○/「交換過程」ってどこに書いてある？

境/「第IV形態の重要性」のところ。ここでゲーテが引用されている。

○/そうなの？ この中にゲーテが入っているの？

境/「最初に行為ありき」と。人間は行為するとき、意識して行為するでしょう。ゲーテのファウストは、「最初に行為ありき」と逆を言った。でもそれは、何かに支配されて行為しているから、「最初に行為ありき」。意志の前に行為がある。そういうことを言っているわけ。そして、貨幣制度ってそういうものだ、とマルクスはゲーテを引用して言っているわけ。(もともと、ゲーテが「最初に行為ありき」といったのは、聖書にある「最初にロゴス(言葉)ありき」をひっくり返したもの。マルクスは交換過程で聖書にも言及し引用している。「彼らは心を一つにして己が能力と権威とを獣にあたう。この徽章<しるし>をもたぬすべての者に売買いすることを得ざらしめたり。その徽章は獣の名、もしくはその名の数字なり」ヨハネ黙示録。これは貨幣生成の共同行為を記述したのもので、当時にとっては、この共同行為は、無意識ではなくて意識されていたのかもしれませんが。・・・後日追加)

○/全然分からな—い!

境/あなたが行動しようと思ったら、あいつに石投げようと思ったら、先に「石投げよう」と思うでしょう？ 投げる前に。

○/投げる前に、「石投げよう」と思う。多分。

境／投げる前に、何のために石を投げるかというのは、頭の中にあるでしょう。それが、先に石を投げちゃって、後から考える。貨幣を作るというのはそんなことですよと。

○／貨幣を作るのはそういうこと？ へえ！

境／それを本能的共同行為なんて言っているけど、噛み砕いたらそういうこと。あなたは考える前に行動してますよ。それが、この間からAさんが「分かん」と言っている、値段を付けたときに貨幣を作ってますよという話。Aさんというのは一風変わった素敵な小売店をやっている。そして、自分の商品に値段を付けている。それであなたは貨幣を作っているんですよ。そう言ったら「分かん、分かん」って。貨幣を作る行為をしているけれども、それは考えずにやっているということ。

○／銀行が利子を付けるときにお金生まれるのかと思っていたんですが、値段付け行為だけでお金生まれている？

境／しかもそれは金をお金にしている。今は、金は貨幣じゃないという意見が結構多いけど、やっぱり金は貨幣。金は貨幣じゃないという説では、なぜ物に値段が付いているかを説明できない。物の値段が付くというのは価値尺度、貨幣としての金の第一の機能です。商品の価格を金以外の物でどうやって付けるの？って、説明できない。しかも、ちゃんと中央銀行の地下室に金はあるわけ。

○／金イコール貨幣なんだ。

境／しかも、金の市場というのがあって、それはそれで取引されているし、中国なんか一生懸命に金を買っていますよね。

○／へえ。見たことないから、知らなかったわ。

境／絵を描くとしたら、外から見ている眼があって、そこから見ている風景と、中で動いている人が考えていることが全然違うみたいな絵にできたら、何とか表現できるかなと思う。

○／そのビジョンが全然分からないけど、いちばん後ろの絵みたいなやつでしょう？

境／この絵でいくと、本能的共同行為というのはこれ（3枚目）なんです。

○／後でこれ、劇でやってみよう。

境／人々の後ろに黒い影がついているでしょう？ この影が無意識の共同行為。人は知らん顔しているわけ。

○／気がついていないってということ？

境／こういうことをやっているとは思っていないから。黒の無意識の共同行為が金を貨幣にしている。こういう仕立てなんですね。

○／黒い人が細すぎて、分からなかった。どれのことかなあとって。

境／魚を持って、自分が「これ、いくら！」って言っているわけ。「これ、いくら！」って



言っていることで、そうと知らずにみんなが手をつないで貨幣を作っている。

- ②商品世界では人間の力（対象化された労働）が商品に憑りつく
- ③人間に憑りつかれた商品は社会的象形文字で人にサインを送る

境／社会的象形文字というのは、第Ⅰ形態、第Ⅱ形態、第Ⅲ形態、第Ⅳ形態という4つをマルクスは言っている。これを文字として見ようと。こういう形を文字として読もう。

○／社会的象形文字の意味、分かる人？ 社会に書かれている記号ということらしいんだけど。

境／ヒエログラフだったら紙に書く。

○／それか、石とかね。

境／ロゼッタストーンとかね。でも、社会に書かれているから、全然紙じゃない。しかも、完成された形は価格表。これ500円という値段が付いている。それが社会的象形文字。そこまできたら分かるでしょう、これ500円払わないといけなくて。そういうことを遡っていったら、こんな四つの形になるということ。

○／これは「白大豆です」って書いてあるのは、社会的象形文字？

境／ではない。それは物の属性。500円出さないと買えない、とコヤツは主張しているわけ。

○／他にはどんなことを言ってるの？ サインを出しているんでしょう？

境／例えば、これだったら1500円とか。

○／それがシャツだっていうことは、そこには含まれていないんだね？

境／それは見たら分かる。「シャツが1500円」というのは象形文字。それは人間は分かるわけ。あ、これは1500円出さないと買えないんだなって。ところが、なぜシャツが1500円ということになっているのかということが、商品と貨幣の秘密なんだけど、それは分からない。それは結局、価値の実体は労働だと言うんだけど、そういうのは見えない。

○／このサインが難しいよね？

境／サインって、野球でやるよね。

○／そうだね。「次はカーブを投げろ」とか。

境／だから、これは「500円払え」というサインだ。

○／その商品がサインを出しているの？

境／物によって、いくら払えっていうのが違うわけね。

○／じゃあ、最初は付いていないわけ？

境／市場に出す前は、付いてない。

○／で、だんだん付いて行くわけ？

境／「これにいくら付けようか？」と持っている人が考えて、とにかく「これぐらいにしないと売れないぞ」と。

○／「これぐらいにしないと利益が出ないぞ」とかね。

境／それも、サインを受け止めているわけ。市場から。

○／人間が、その物に対してイメージを投げかけているのに、そのイメージが独立しているものとして受け取られてしまうということですか？

境／イメージというより、人間が物を作ったわけでしょう。そこに労働を提供しているわけ。ところが、それが透き通って分かるんじゃなくて、商品の価値形態という形をとって貨幣で表現されている。それが逆にサインになっている。もし商品じゃなかったら、この物にはいくら労働時間がかかったか分かる。でも、それが分からないような仕組みで、価格としてかえってくる。

○／今の、全然分からなかったけど、後でBさんに聞く。

○／値段は、その物がどれだけの労働がかかっているか分からないけど、それを500円で売ろうが1000円で売ろうが、自由にできる？

境／自由にはできない。高くしたら売れないもん。

○／5万円とかになっても売れない。

境／巨人軍の長嶋がもっていた、というような希少価値があれば別。

○／プレミアがついてとか。有名な野球選手が使ってた、とか。

④人間はそのサインのすべては理解できないが、貨幣の生成の仕方と価格の表示はわかりそれに従う。モノ（事物）に意志支配される

⑤モノ（事物）に意志支配されても支配されているとは感じず逆に利用していると考える

境／ここは結局、お金の誕生のことを言っているのだから、値段が分かるというのは、説明したら大体分かる話だけど、貨幣を作る共同行為というのはなかなか・・・「最初に行為ありき」というふうになってしまっているから、貨幣は作れるんだけど、それを作ったことも分からない。毎日毎日、みんなが商品として市場に出すたびに、貨幣はその都度作られているということをお願いしたいんですね。ここがヤマです。これを上手いこと翻訳できたらバンザイ。

／ぶどうジュースが大人気。Aさんからサインが・・・みんながぶどうジュースのサインを受け取っている。

### 第三章 劇第一幕 社会的象形文字の第I形態

○／そろそろ劇に入りましょうか。もう⑤番まで行った？ では、「社会的象形文字としての商品の価値形態Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを。私がシャツを持ちます。つまり第Ⅰ形態というのはどういう？

境／第Ⅰ形態は、5メートルの布=1枚のシャツ、という形です。これは価値の等しい二つの商品が等置されていることを表現しています。この場合、布は相対的価値形態にあり、シャツは等価形態にあります。

○／私はシャツで一す。

境／シャツの方が強いわけ。だって、物を買う力がある。布は「相対的価値形態」と言って、人格は捨象してるんだけど、もし人格を入れたら、布を持っている人がシャツを買いたい。

○／布さんがシャツさんを買いたい？

境／布だけじゃ着れないから、シャツが欲しい。

○／シャツの形になっている物が欲しい、布さんは。

境／うん。だから布を製造している人は、シャツが欲しい。ということは、シャツを持って行ったら布が買えるわけ。

○／なるほど。完成形ということですね？ 進化形というか。

境／布からシャツになるということはある程度考えないで。

○／じゃあ、違う物のほうがいい？

○／こっちはこっちを買えるけど、こっちはこっちを買えない。

○／じゃあ、豆にしとく？

境／お百姓さんは、シャツが無くなったのでシャツがほしいと思っている。そこで、シャツを作っている人が、「ちょっと腹減ったし、大豆食べたい」と言ったら成立するんだけど、そうじゃなかったら成立しない。

○／だからシャツが強いついていうこと？ なるほど。

境／シャツにはこれを買う力があるけど、これにはシャツを買う力はない。シャツがほしいということが表現されている。

○／なるほど。シャツにとっては、パンでもいいかもしれないもんね。腹が減ってるから。

○／片思いなんだね。両思いになれなくて、ずっと片思い。両思いになれる可能性はあるけど、すごく高嶺の花状態。

○／なるほど。シャツのほうが自由度が高いなあ。

境／選択権があるわけ。こういうのが第Ⅰ幕でございます。第Ⅱ幕は2人ではできない。

○／ここにお茶があります。このお茶、すごく良いお茶なんだ。みんな匂い嗅いで。メチャクチャ良いお茶ですよ。

境／Cさんがコーヒーを持っているとする。そうしたら、布は、たまたまシャツとだけ関係しているんじゃないくて、他のあらゆる商品と恋をしているという関係。

○／ああ、そうか。布はこの3人ともを好きなの？

境／そうそう。こっちに好かれるかどうかは別。だから、ある意味で、商品交換しようと思っても、なかなか難しい。

○／シャツがいちばん優位ということね？

境／こっち側はどれでも買える。

○／あ、そうか。我々は優位。良いお茶だし。

○／私、分かってないです。なぜこっちが優位なんですか？

境／物を買う力がある。布を買う力が、それぞれある。

○／なぜあるのですか？ 今すぐ使える物か、そうじゃないかっていう？

#### 第四章 劇第二幕 第Ⅱ形態から交換過程

○／第Ⅰ形態では、5メートルの布と1枚のシャツがイコールになっている。あとは第Ⅱ形態だという設定になっているの？

境／第Ⅰ形態は終わって、次の形態はこういう形態です。等価形態にある商品が増えました。単独の関係だったら、たまたまそういうことだったけど、結構これは普遍的な形だということになるんだけど、でも交易は偶然にしか成立しないということになるわけね。今度、第Ⅲ形態は逆なんです。シャツを持っている人とか、お茶を持っている人とか、コーヒーを持っている人とか、これを欲しいと言っているわけ。ということは、これですべてを買えるわけ。関係を転倒させただけでそうっちゃう。だから、これが貨幣のポジションにあるわけね。今の現行版の資本論では、この形から、次の第Ⅳ形態で、等価形態の商品が金になっているわけ。それが貨幣形態だというふうになっている。だから、価値形態論で貨幣形態まで行っちゃったわけ。でも、初版はそうではなくて、第Ⅳ形態は、この誰もが物を買えないかたちなわけ。

結局、この第Ⅱ形態がたくさんあるわけね。だから、今僕はここにいるけど、今度はあなたがここにいるわけだ。そしてまた今度はあなたがこっちへ行って、こっちへ来るわけ。これが資本論初版の第Ⅳ形態。そうすると、これは貨幣じゃない。こっちは買いたいほうだから。それでこっちが買えます。あ、そういうふうにしたらいいのかな。自分の商品で他を買いたい、買えます。この己ぼれの商品ばかりになったら、結局交易は成立しない。それで次にこの第三図になるわけ。

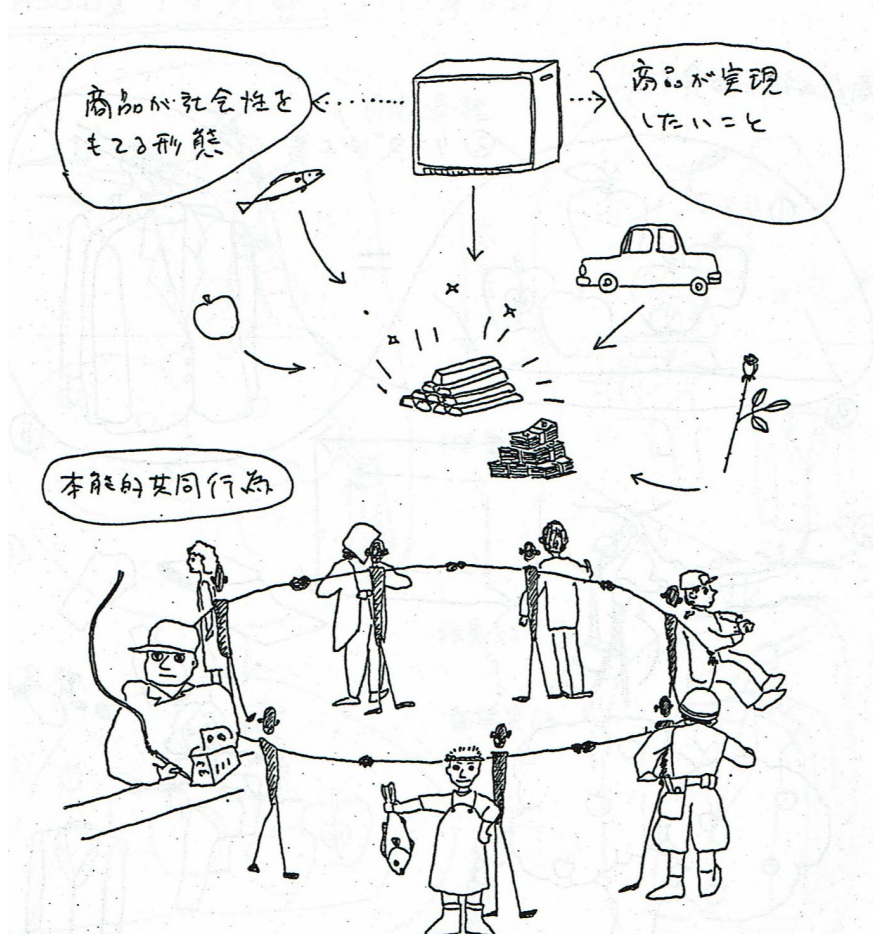
○／この、人の背後にある細い、黒い影？

境／我々はみんな、背中を向けて、無意識のうちに行為をする。ここにある金となら売ってもいいよと。

○／なるほど。じゃあ、金の役をやるね。

境／「金となら売っていいよ」というのは、金なんて誰も必要とは思わないやん。

### 第三図（交換過程における本能的共同行為）



商品生産者たちは、自分たちの生産物に価値をつけることにより、商品の想い(上図)を実現しているのだが、誰も、共同行為をしているとは気づかない。

それはモノの想いを実現しているからで、人は自分たちの共同行為を意思行為として意識しない。

○／みんな金を欲しがらないの？

境／今はみんな欲しがらるけど、金なんて日常生活の役に立たないからね。だから、要らないんだけどしょうがないから、じゃあ金となら交換していいよということ。

○／誰か、黒い影の役をやってくれない？

境／この黒い影に支配されて、「じゃあ金となら交換しようか」とみんなが思ったら、金が貨幣になる。

○／黒い影はみんなに取り憑いているのね。何してるの、そうやって。

境／命令をしているわけ。

○／なんて命令してるの？

境／金となら交換していいというふうに行為しなさい。

○／行為しろ！

境／逆に言うと、人格がない商品だけでは貨幣はできずに、人格が商品の思いを忖度して、商品に意志を宿し、無意識のうちに共同行為をしたら、金が貨幣になる。こういう筋になっている。

○／分からん！ 分かった？ ちょっと外側から見てみたいから、この黒い役をやってください。

○／はい。何か、メッチャ小さい話だったら、生産者の顔が見える行為だったりするということ？ 境さんが思っていることは。

境／逆に言ったら、買えるというのはむしろ市場だから、市場だけで人は関係していて、それ以外はまだつきあいしてはいないわけ。もし市場なしの交易だったら、みんなそれぞれ素で付き合えるわけ。今はこうなっている。市場だけで交換していて、あとはバラバラ。だから難しい。

○／分からん。そのシーンをもうちょっと演出してください、境さん。みんなにセリフを与えたり、動きを与えたりして！ 境さんが監督役ね。

境／僕は商品の本性になって、みなさんに命令する。この初版の第Ⅳ形態は、みんながこうしたいでしょう、自分の作った物ですべての物を買いたい。そらそうだろう？ 誰だってそうなんだけど、そんなことをしたら何も買えませんよ。だから困るわけだ。そこで、考える前に行動した、と言うわけね。それは、この黒い影の言うことを聞いたわけ。黒い影は、「こういうふうにしたら物を買えますよ」と言っているわけね（マルクスは、人格が商品に意志を宿すといっている）。結局どういうことかということ、自分の商品で物を買うんじゃなくて、自分の商品を金となら交換してもいい、そういう行為をするわけ。そういう行為をしたら、共同行為をして、こんな形（初版第Ⅳ形態）からこんな形（第Ⅲ形態、一般的等価形態）へまた戻れる。逆に言ったら、この形（第Ⅳ形態）が貨幣になるというのが今の資本論だけど、初版は、この形（第Ⅲ形態）から一旦、貨幣ができない形に行っちゃうわけ。そこからこっちへ戻ろうとしたら、人間が無意識のうちに本能的共同行為をしないと、これはできません、ということになっている。

○／本能的共同行為が値段をつけるという行為なんですか？

境／値段をつけるという行為の裏に、本能的共同行為がある。逆に言うと、本能的というのは人間の本能じゃないよ。人間の本能じゃなくて、商品の本性。商品の本性に身を任せる。物に値段をつけるというふうにしか人間は意識しないけど、その裏に共同行為に加わっているということがある。

○／値段をつけようと、商品のほうが金を使ったら買えますよと命令してくることが、本能的共同行為？

境／それが商品の本性。商品としては、この第Ⅲ形態の形にしたら交易できるぞと。みんな自分の物で物を買うのは無理だと。それをやめて、逆にしたらできるという商品の本性を、意識せずにやっている、人間はね。それは単に、物に値段をつけるということは、その値段の実体は金だから、金となら交換していい、と言っているわけ。金となら交換していいという共同行為が、金を貨幣にしている。そういうことなんです。

○／それは商品からの声なの？

境／うん。商品がそういうサインを送っているわけ。

○／先に人が取り憑いた商品が、そうしているんですよね。取り憑きがないと、そうはならない。

境／商品にならないですよ。

○／物として存在するだけの状態。

境／そう、市場に出さなければね。値段をつけるということは、市場に出すということなんですよね。市場ってどこかにあるんじゃないで、商店とか全部、そんなのは市場です。Dさんがバイクでパウンドケーキを売る、あれは市場なんだ。

○／市場に売りに出るとのことね。私はカフェコモンズというところから商品、例えばパウンドケーキを40個仕入れます。仕入れて、勉強会のところに持ってくる。持ってきて、ここを市場にするわけですね。本当なら市場ではなかった場でも、市場になり得る。

境／あらゆるところに市場はできる。

○／常に市場なんだよね、多分。

境／商品があるところが市場。普通、「市場」と言ったらイメージするけど。

○／なんか、卸売市場みたいなものじゃなくて、本当に市場。人が2人、3人いて、物売り買いしたかったりとか・・・

境／それは市場であり、貨幣発生の場合なんだ。ここでも貨幣が発生しているんだ。

○／ぶどうジュースにお金払ってるからね。

境／やっぱり劇をしたほうがいいかな。

○／それを気が付かずにやっているというのが、この黒い影なわけね。

境／そうだし、お金依存症の原因。

○／これ、モモの本だったっけ？ なんか灰色が出てくるでしょう。

境／灰色の男。

○／その灰色みたいなのも、その黒に似ている？

境／灰色の男は時間泥棒で、あれは資本家のことなんだ。

○／黒は？

境／今の黒は、資本家ではないな。商品の本性。

○／でも、さっき商品が要求するという話だったけど、商品を擬人化しているだけで、実際には要求は本当は無いわけじゃん。

境／それが社会的な象形文字を書いているというふうに見る。商品に値段がついているということを遡っていったら、こういう図だ、とマルクスは言うわけ。こんなの誰も分からないでしょう。本当はこんなのあるわけないからね。「これはいくら」ということしかない。それしか見えない。それを探っていくたら、こういうところまで探れるぞということ。これはある種の頭の中の産物だけど、でもリアリティがある。

黒は商品の本性で動いている人間だな。人間の無意識の行為かもしれないね。そこまで含んでいるかもしれない。これ、人の形をしてるでしょう。

○／これは誰が描いたの？

境／これは三木さんといって、僕らが本を作っていた頃にイラストを描いてくれていた人。

○／境さんが描いたわけじゃないんだね？

境／もちろん。

## 第五章 思考による分析的抽象と価値形態の関係による抽象という方法の違い

○／この第二図にある、左の「商品の行う抽象化」「リンゴは上着」というのは？

境／これは第Ⅰ形態の説明。第Ⅰ形態は、最初のページに「労働過程」というのがあるでしょう。人間は頭でいろいろ比較して、抽象して、抽象的労働があるというふうにして、それは価値実体だという。今日の別紙の説明ね。この商品の目次を見たら、第1節「商品の二重性」というのがあって、第2節が「商品で表示される労働の二重性」というのがあるわけ。僕はこれをすっ飛ばして、お話し会では第3節からやったわけ。なんでやったかという、昨日Aさんと話していて「おっ」と思ったんだけど、この第1節、第2節と第3節では方法が違う。この最初の絵は、第1節、第2節の方法を絵にしている。第1節と第2節は、1つの商品を考えて、リンゴも上着も労働生産物であると。労働が入っていますよと。栽培する労働、縫製している労働。それで「できました」と。これとこれが同じだというのは、結局そこに労働があるということとでしかない。だから、リンゴとか上着という具体的な有用労働を抽象した抽象的人間労働が価値の実体だということを、1節・2節で説明しているわけ。

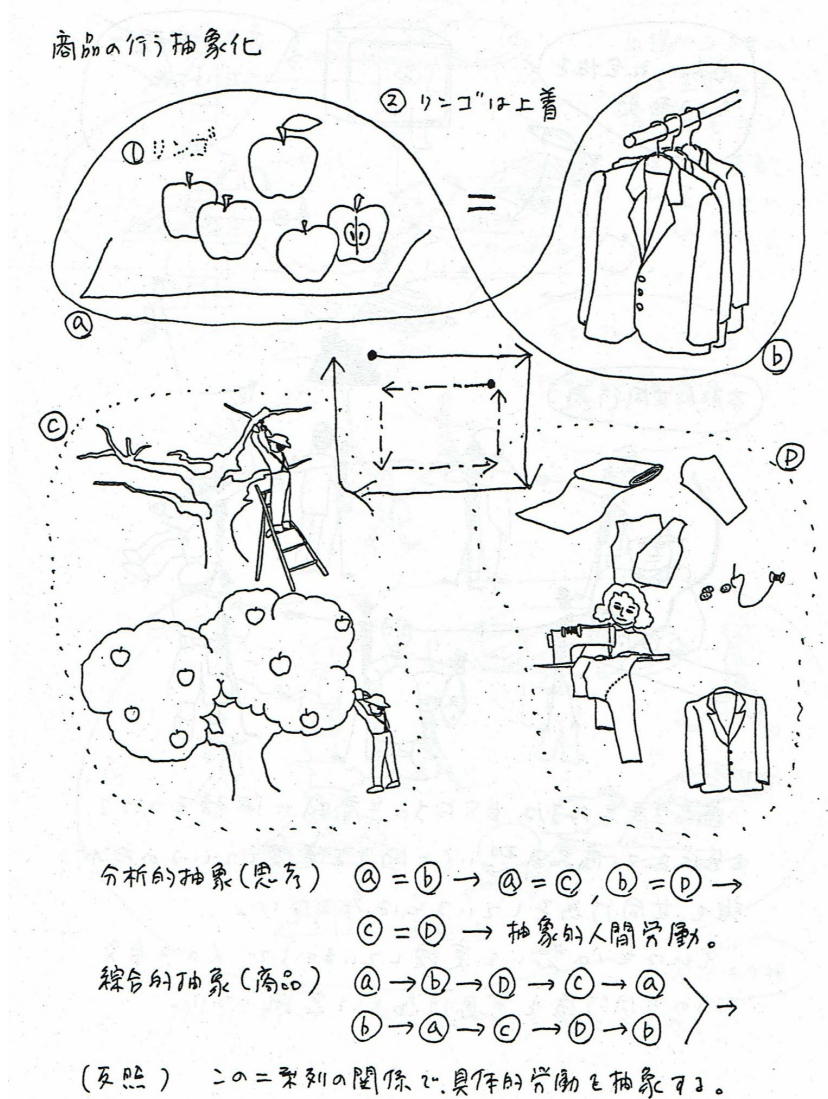


これは分かりやすい話。誰でも分かる。分かって、次に、価値形態に行くと、「リンゴは上着」となるわけ。これは価値形態。

○／リンゴは上着であり、上着はリンゴであるということ？

境／ではない。リンゴは上着。これをひっくり返したらアカンねん。数式だったらひっくり返していいけど、価値、商品の関係だからひっくり返せない。これはさっきも言ったように、上着を持って行ったらリンゴが買えますという関係。

第二図（第3節価値形態論における総合的抽象）



○／上着のほうが強い？

境／うん。「分析的抽象」と「総合的抽象」と書いてあるでしょう。これはなかなか理解してもらいにくいんだけど、分析的抽象というのはさっきの1・2節のやり方で価値の実体は労働であると言ったわけだけど、それじゃこれが分からない。分からないから、みんなここ

で挫折する。資本論を始めから読んでいって。

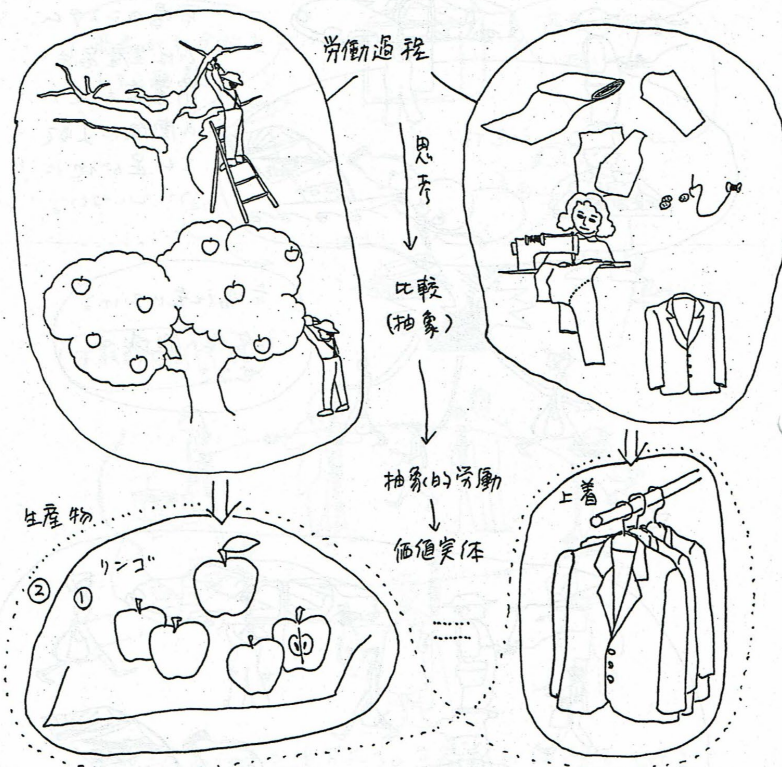
○／難しく書かれているわけ？

境／いやいや、理屈が分からない。理屈の組み立てが違っているんですよ。だから逆に、いきなり1・2節はやめて、価値形態から始めたの。なぜかという、先入観なしに読んだほうがいいよという意味で、あんまり意図しなかったけど、結局僕はそういうことをしたのかなと思って、今回理屈の違いをちょっと書いたわけね。それでニュートンの光学とゲーテの色彩学。むしろニュートンの光学はこっちなわけ。光を、色とかは全部抽象して、全部混ぜたら白色になる。なぜそうかという、プリズムでやったら太陽光は全部7色になるというようなことを理論化したわけね。それはこっちなんや。人間の頭で考えて抽象していく。

○／分からん！ 分からん！

第一図（思考による分析的抽象）

『ASSB』女子行録 (1993年5月)



商品の二つの形態 ①と②。

生産物としてのリンゴと上着はそれぞれ別のもの、＝使用価値。

価値とは、リンゴは上着。

分析的抽象による価値実体の発見。

○／プリズムのことは書いてないの？

境／書いてない。

○／プリズムとそれが一緒って、今、分かったの？

○／いや、分からん、分からん。

境／プリズムは太陽光を分割している。それで色になっている。

○／それは分かる。

境／それで、その波長がいくら、いくらというのをニュートンは計算した。それは、どちらかと言ったら、冒頭部分の分析になる。商品をこういうふうに分けていって、抽象的労働だということと同じこと。

○／あー。なんとなく分かった。

境／なんとなく分かるやろ？ それでこっちは、色彩を見ているわけ。ゲーテみたいに。

○／あー、色を見ているのか。こっちは光を分けていて、こっちは色自体を見ているということ？

境／そうそう。だから、ニュートンは一見、色は言っているけど、色自体は問題にしていな  
い。ゲーテは色、この色とこの色は補色であるとか、そういうことを言うわけね。分析のし  
かたが全然違うわけ。ゲーテは、人と光の関係、人間の色彩感覚と色の関係を見ているわけ。  
分かる？

○／赤を見たらあつたかい気持ちになる、とか？

境／まあ、それは心理学の話になるけどね。そこまで行かなくても、この色は美しいと思う  
とか、この色とこの色を足したら気分がいいとか。

○／食欲をそそるとか。

境／そういうふうに応用できるようなのがゲーテの色彩論。

○／さっきの労働過程とリンゴと上着の話ね、第 1 節というのは分かりやすい。次のペー  
ジは第 2 節なの？

境／先にあげた第二図は第 3 節。価値形態。本番。

○／これは、さっきのページよりも進んで、リンゴは上着で、上着はリンゴというのが成り  
立たないという話があるやん。そこからちょっと難しくなってくる。

○／そう。この話やったら、上着はリンゴを買えるけど、リンゴはこれを買えないんですよ  
ね？ それが、奇跡のリンゴとかあるじゃない？

○／青森の、1 万円とかするやつ。

○／そう、それ。そしたらこっちのほうが確実に1個の価値があるじゃないですか。ものすごい労働力も使って。そうそう、木村さんですよ。なんで木村さんがこんな一着の、もしかしたら大量生産かもしれない上着を、なんでなんですか？　これが分からないんです。

○／何を導きたいから？　この式は何を導きたいからこれを私たちに言ってるの？

境／特別な物じゃなくて、普通の物。普通の一般の物。プレミアム付きの商品ではなくて、普通のリンゴ。

○／ただのリンゴ。

境／農薬をいっぱいふりかけた、普通のリンゴ。これがひよっとしたらユニクロの服かもしれない。

○／まあ、ユニクロのリンゴとユニクロの服なわけやな。普通の物やな。

○／だから、ここの価値自体は問われないってということでしょう？　両方ね。

境／等しい価値の物が等置されているというふうなことは、この価値という抽象的なものの関係にあっては、具体的な二つのものが、その関係によって、二つが関係することによって、抽象されている。リンゴと上着が関係することによって、リンゴは点線になっているでしょう、リンゴが抽象されている。

○／「抽象されている」の意味が分からない。

境／「リンゴは上着だ」と。

○／抽象的な存在になっちゃっているのね。

境／そうそう。

○／これがリンゴだとしたら、急に抽象的な、Aさんみたいなもの、みたいな感じになるの？

境／リンゴが上着を欲しい、俗的に言えば、リンゴは上着を欲しい。上着に恋していたら、もうリンゴでなくなるやん。心は上着になる。そう言ったら分かるかな？

○／恋というよりも、なんか、「なりたい」みたいなこと？　リンゴが上着になりたいと思ったときに、でもリンゴは上着になれない。

境／交換したいということは、そういうことだからね。でも交換したら変われるわけやん。でも、これは交換する前だからね。とりあえず「交換したいわ」と言った途端に、リンゴの絵が実線から点線になる。

○／なるほど。その瞬間を、今、切り取っているわけね。

境／そうそう。

○／今、上着は「リンゴになりたいな～」とかは思っていない、その瞬間ね。

境／なぜリンゴが抽象化できるかというと、両方とも労働だからだというのがあわけね。人間労働という共通性があるからそうなんだけども、さっきの分析的抽象みたいに頭の中で考えるんじゃないで、物どうしの関係で抽象していった場合、それがこの図なんや。

○／なるほど。労働ということを見ないで、物を見るわけね。

境／裏にはあるんだけどね。

○／裏には労働はあるんだが・・・

境／それは考えずに、これだけでいくわけ。

○／はい、隠す。リンゴは上着になれる。上着はリンゴになれない。その瞬間を切り取ってるんだよね。

境／図に矢印がこうあるやろ？ この関係において、どういうふうに抽象されているかという順序を書いているわけ。

○／ $a \rightarrow b \rightarrow d \rightarrow c$

境／「リンゴは上着です」と言った途端に、リンゴが抽象されて、これに等しいんだということになる。上着を作る労働と自分は等しいんだと。ということとして、逆にリンゴも労働の産物だということになっていって、戻ってくるというコースと、逆のコースと、両方ある。これを反照というんだけどね。お互いの関係の両極が反照し合っていると、ヘーゲルはそこまで言っている。それがなかなか難しいね。結局、この二つのものの反照の関係で具体的労働が抽象されているということが分かる、とマルクスは言っているんだけど、それはなかなか分からない。やっぱりここがヤマですね。これはなんとなく分かるやろ？ こっちよりもこっちのほうがまだ、なんとなく手に負えるやん。問題はこれや。

○／3 節ね。

境／そこをね、これは関係一般をこの理屈で解析できるんじゃないかということで、文章をいっぱい書いているんです。文化知についての論文がそうですが、なんか難しい言葉がいっぱい書いてあるので、紙芝居にはならないんですけどね。とりあえず、5分でこれを説明しようか？ この図を持ちながら言わないといかん。「リンゴは上着」であるというのを価値の現象形態とまず見るわけね。現象形態って普通見れば分かるものやんか、感覚で。感覚で分かるものなんだけど、価値の現象形態は感覚では分かりませんというわけ。

○／この、超感性的なというのは、そういうことを言ってるの？ 超感性的な、か。

境／うん、超感性的な現象形態。だから、価値と価値の関係は超感性的です、と。感覚で分かるのは、リンゴと上着が関係しているということは分かるけど、そのリンゴと上着の関係は、実はそこに超感性的な価値の現象形態があるというわけ。その価値の現象形態において、2つの極は自然物。まあ労働は入っているけど、自然物。自然物のこっちのほうに買う力がつくわけだから、これが形態規定されるとマルクスは言っている。形態規定というのは、この関係の両極があって、その両極の一方の極が自然物でありながら、物を買うという社会的力を持つ。これを形態規定と言っている。

○／社会的力を持つイコール形態規定。

境／これは、人間の関係でもそうなるわけ。こっちが人民で、こっちが王様というふうに考えたら・・・

○／はあ、自然物ってそういうこと？

境／うん。人間は王様を崇拝しているやん。王様を崇拝しているからただの人間が王様になれるわけや。王様だって天皇だって、一人の人間やんか。日本人は天皇を崇拝している。それがこの関係やな。崇拝の関係。そうすると、崇拝しているということで、ただの人間が王様になる。そういう関係。もちろんこの関係は、単に心理的なものではなくて、その関係を維持しようとする暴力も含めた様々なヘゲモニーが働いているわけですが。

○／すごい子どもじみたことをちょっと言っていていいですか？ 単純に、リンゴもスーツも一般的な物としたときに、例えば変な話、スーツは1回買ったらずっと着れますよね。リンゴは食べた一瞬で終わりですよね。しかも1個ずつで考えると、大体1個100円とか200円とかぐらいまでですよ。スーツは1着大体5000円以上からですよ。そういうふうに人間が勝手に思っているような社会的通念かもしれないけど、スーツは大体金額これぐらい、リンゴは食べて終わりの消耗品、みたいな。労働は、ともに労働者が頑張っているけど、そこは見ずにしたときに、そういう社会的な通念でスーツのほうが価値がある、そういう意味？

境／これは同じ価値。あなたが問題にしているのは、商品の使用価値の方。

○／じゃあ今のは全然違う。

境／個数は少ないからな、もうちょっとたくさん描かないといけないのかもしれないけど。

○／個数が少ない。そういう話なの？

境／いやいや、同じ価値だから、リンゴだったら300個くらいあるかもしれない。

○／なるほど、そういう意味な。使い道の話とは全然関係なくて、という話ですね。

境／逆に言うと、僕はここの話は、そういう人間関係で説明したほうが早いかなと思うんですけどね。例えば、今は天皇の話をしたけど、Aという人とBという人がいて、Aという人がCという人のポケットに手を突っ込んで盗もうとする。すると、こっちが「ダメよ！」と言う。「ダメよ」と言うことは、法律なり倫理を代表している。Bさんはただの人間なのに、その瞬間は法律の化身になっているわけ。あるいは道徳の化身になっているわけ。それでたしなめている。これはそういうふうにも応用できる。みんなそうやんか。結局、人々は具体的な人間でありながら、常に社会的なものを代表しているわけだね。そこはなかなか分からない。社会学ではそんなことやらないしね。

○／赤ちゃんみたいなこと？ リンゴにはそれは無い。倫理的なものとか社会規範。

境／これは、価値と価値の関係だから。

○／リンゴがスーツを崇めているから、そういうふうになる？

境／これは、リンゴがスーツを欲しいというふうに言っているだけの話。これは価値だからね。別に犯罪の関係でもないし。今はこの意味を言うために、上着という自然物に物を買うという社会的力が備わるといふのと同じような意味で、スリをしている人間に対して、見ているヤツが法律の化身になると。

○／上着も自然物？

境／上着も自然物ですね。労働が入っているけど。

○／リンゴが自然物は分かるけど、上着が自然物というのは。

境／羊毛は自然物だけど、ポリエステルは人工物だとか、そういうレベルの話ではない。

○／スーツは木にならないとか、そういう意味ではないんだな。

境／いろいろ皆さん、イメージが違うから議論は白熱しますが、どちらかと言うと、これだけで理解は大変だから、こういう社会関係も含めてやったほうが分かりやすいかなと思っちゃっているんですが。思考の論理と存在の論理というところは、思考の論理は分析的に抽象していくわけね、物を分けて。ところが、存在の論理というのは関係によって抽象されている。ある意味、スリを見て「けしからん」と言う人は、人としての自然性を抽象しているわけ。そして法律の代表になっているわけ。

○／裁き人になっているということね。自分の倫理観をもってして。何かを代表して、みたいなこと？ Aさんも抽象化されているということよね？ 「お前はスリだ」というふうに抽象化されているということ？

境／罪名を付けられているよね。

○／「窃盗犯だ！」みたいな。

境／類と個の転倒というのは、この場合、貨幣で言ったらいいけど、貨幣は商品の中の類的存在なわけね。普通、動物の分類学で言ったら、個があり種があって類があり、動物は類、あとイヌとかサルとか具体的な種の分類をしていくわけだけど、動物そのものはいないですよ。「動物連れてこい」と言われたら、そんなのいないわけだ。人間を連れてくるか、サルを連れてくるかになる。ところが、貨幣というのは、「貨幣連れてこい」と言えば、「はい」って貨幣はポケットに入っている。だから類的なものが個になっているわけね。そういう理解とか、いろいろ面白い話がいっぱい出てくるんですけどね。これを子供の哲学にまでしなきゃ、絵本にならないわけ。

○／もう9時過ぎたので、一旦ここで中締めして、感想を回して、終わりましょうか。

○／もうちょっとわかりたかった、わかったところはあってそれは嬉しかった。わからなかったところは悔しい。

○／めっちゃ大事なことを言ってそうな雰囲気はわかる、もうちょっとわかりたかったが、これは入り口だと思った。自分の中で絡まっているものがこれでほどけるかもしれないと思った。

○／ちょっと近づけている。人間が投影しているのにそっちの方の言うことを聞いている

というのは、いろいろつかえらるとおもう。

○／何のためにこれを知るかということが自分の中にある、多分こういうことだろうというはあるがもうちょっとそれをはっきりさせたい。お金という事について根本のところから考えるということをやろうとしていると思うし、つかみ切れていない。

境／政治運動をやってきて負け続けてきて、なんで敗北したのかということを考えていたが、商品から貨幣を作っているのが無意識のうちでの本能的共同行為だということがかわかると、過去の大きな物語はダメだとわかった。つまり、政治権力を取って革命（商品・貨幣をなくすこと）するということは無理だとわかった。というのも、本能的共同行為は意志の力ではなくせない。本能的共同行為が起らないような関係を迂回して造る。そのような交易関係を迂回して造り出すことで死滅するだろう。商品売り出す人がいなければお金は死滅する。お金の使わない人が増えていって市場が小さくなっていく、というイメージ。そういうことをやろうとすればお金とは何かということへの理解が必要だ。

○／それはすごくわかった。

○／本能的共同行為は環境が変わらないと人間にはコントロールできないのかな。

境／今の市場から抜けだしていている人は沢山いる。しかし、その人たちがつながるのが大変。

○／孤島でならできるとし、ハイパーインフレになれば可能になるのかな。

○／地域通貨は、本能的共同行為から遁れられるか。

境／逃れられると思う、交換するものを商品として扱っていないと思う、利子つかないお金では。

○／交換だけでなく利子がつかなくて、蓄積が起こらないことが大きいのでは。

境：人と人との結び付け方がお金とは違う。人と人との関係がお金の関係とは違うのでそれが萌芽となる。